



ヤナギ

人々の間にいたが、そのとき天が開かれ、わたしは神の顕現に接した。(エゼ 1:1) と預言を初めています。エゼキエルは捕囚となったことは、背信のイスラエルへの神の裁きと受け止めました。異教の異国での奴隷のような日々はどんなに辛く苦しいものかと思います。

詩人は泣きながら 豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。(2) と記していますので、神殿の詠唱者か、豎琴の演奏者ではないかと思います。わたしたちを捕囚にした民が／歌をうたえと言うから／わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして／「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。(3) と、バビロンの民の前で演奏を拒否しているのです。バビロンの民には、賛美の歌も、余興、遊びであり、楽しもうとしているだけのようです。バビロンの民に賛歌を慰みものとされることは、詩人にとっては、イスラエルの神が軽くあしらわれ、慰みものにされ、汚されると感じて、耐え難い苦しみとなるのです。そのため、どうしても歌いたくない。どうして歌うことができようか／主のための歌を、異教の地で。(4)

けれども詩人は豎琴を奏で、賛美の歌を歌うことが使命で、生き甲斐なのです。エルサレムよ／もしも、わたしがあなたを忘れるなら／わたしの右手はなえるがよい。わたしの舌は上顎にはり付くがよい／もしも、あなたを思わぬときがあるなら／もしも、エルサレムを／わたしの最大の喜びとしないなら。(5-6) エルサレムの神殿で主に心を込めて、賛美した感謝の時を思い返し、どうしても歌いたい。異教の地に留まり、この地の習俗に慣れるうちに、故郷を忘れ、信仰も捨てるようなことがあってはならない。けれども、余興としては演奏することができないというもどかしさを感じます。

同時に、捕囚とされた時に嘲笑したエドム人(エサウの子孫)への恨みを思い返します。主よ、覚えていてください／エドムの子らを／エルサレムのあの日を／彼らがこう言ったのを／「裸にせよ、裸にせよ、この都の基まで。」(7) また、ネブカドネツアルによって殺されたイスラエルの王や王子たちを思い、バビロンの王家への報復を願っています。娘バビロンよ、破壊者よ／いかに幸いなことか／お前がわたしたちにした仕打ちを／お前に仕返す者／お前の幼子を捕えて岩にたたきつける者は。(8-9)

『讚美歌 21』は、137 編を 164「バビロンの流れの」<https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2013-01-14> で賛美しています。20 世紀のアメリカのルーテル派教会の詩人 Ewald Bash の詩にラトヴィア(バルト三国の一つ)民謡を合わせ、捕囚の苦しみを表現しています。ジュネーブ詩編歌は、捕囚の重苦しさを暗示するクルムホルンで始まり、中盤からビオラ・ダ・ガンバとオルガンの清らかな響きで演奏します。[https://www.youtube.com/watch?v=1Ac\\_h98E\\_OA&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=137](https://www.youtube.com/watch?v=1Ac_h98E_OA&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=137)

137 編の冒頭の言葉、バビロンの流れのほとりに座り／シオンを思って、わたしたちは泣いた。(1) にあるように、詩の舞台はガラリと変わり、詩人は捕囚の民としてシオンから遠く離れたバビロンにいます。望郷の念で悲嘆にくれています。流れのほとりとはユーフラテス川の支流の川でしょうか。エゼキエルも捕囚となり、私はケバル川の河畔に住んでいた捕囚の